様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 22 日現在

機関番号：32407
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009 年度　～　2011 年度
課題番号：21560672
研究課題名（和文）　関東における彫刻屋台の建築技術に関する研究

研究課題名（英文）　A Study on the Architectural Characteristics and Building Techniques of *Yatai* in the *Kanto* Region

研究代表者　黒津 高行（KUROTSU TAKAYUKI）
日本工業大学・工学部・教授
研究者番号：20215114

研究成果の概要（和文）：
本研究は、関東に展開する彫刻屋台の建築技術の特質を明らかにすることを目的とする。結果、利根川中流域に点在する屋台は組立解体式の飾り屋台と芸屋台である。現存最古の文政４年の飾り屋台では通し柱で軸部を組む架構を採用したが、安政５年には管柱で軸部を組む架構が登場する。明治期に入ると大型の芸屋台が出現し、回転装置が導入される。こうした彫刻屋台の変遷は、舞台装置の常設化、舞台の拡張、組立や保管方法の簡素化などの要求によってもたらされた。

研究成果の概要（英文）：
This research aims to clarify the architectural characteristics of festival chariots, called *Yatai*, from the viewpoint of architectural techniques in the *Kanto* region. The result can be summarized as follows:

A group of festival chariots, with rich and elaborate wooden carvings, are remaining mainly in the halfway area of the *Tone* River. These chariots, has a temporary knockdown building consisting of a wooden structure, are classified into two architectural styles: *Kazari-Yatai* and *Gei-Yatai.* The oldest *Kazari-Yatai*, was build in 1821, adopted to set up the framework with continuous columns (as *Toshibashira*). Continuously, another *Kazari-Yatai*, was build in 1858, adopted to make the framework with columns (as *Kudabashira*). Into *Meji* era, the large *Gei-Yatai* appeared, existing within the rotating mechanism newly. The development of the architectural style was brought by the functional requirement, in such cases as the permanent establishment of the stage setting, the expansion of the stage, the simplification of the work in the knockdown systems and ways of maintenance for these chariots.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
年度	－	－	－
年度	－	－	－
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：　工学
科研費の分科・細目：建築学・建築史意匠
キーワード：　関東、彫刻屋台、建築技術、架構形式、旧例幣使道、利根川中流域

１．研究開始当初の背景

山車や屋台の曳行などを中心とする祭り行事は日本各地に伝承されており、日本の伝統文化の豊かさを示している。作り物や出し物などの形態に多様な展開が認められ、これが各地の祭りを特徴づけている。

関東各地に残る曳山については天下祭の影響により展開したとされ、芸能文化史や民俗学の視点から紹介され、個々に議論されてきた。しかし、管見の限り建築技術の視点からの比較検討はみられない。とりわけ上州に展開した屋台の実態把握は進んでおらず、各地域の指定文化財であっても図面等の記録を残す例は限られており、基礎的データが十分に得られていない。祭礼を中断した地区においては、地元でも屋台の存在自体が忘れ去られようとしている。

本研究で対象とする関東の屋台は、精巧な彫刻を付けたものが多く、近世社寺建築との関連を探る上でも興味深い対象である。とりわけ上州の屋台（以下、彫刻屋台と呼ぶ）には江戸型屋台の古式を留めたものを残しており、天下祭と祭礼文化の伝播を総合的に検討する上で新資料をもたらす可能性が高い。筆者はこれまで、祭礼時に曳き回す屋台の悉皆調査を実施し、屋台の残存状況を明らかにしてきた。具体的には、伊勢崎や世良田などの屋台の架構や彫刻装飾について比較検討し、実態把握を行った。また、この地域の祭礼屋台の遡る事例として前橋祇園祭礼屋台を捉え、日記や絵画史料をもとに、屋台行列の変遷と屋台形式を明らかにした。

２．研究の目的

本研究は、これまで進めてきた屋台の実態把握による成果を発展させ、架構形式をとおして関東に展開する彫刻屋台の建築技術の特質を明らかにすることを目的とする。具体的には次の諸点である。

(1) 深谷・中瀬地区、玉村、前橋など利根川中流域に残る彫刻屋台の所在を確認した上で、実測図面を作製し、それらの架構および彫刻装飾の現状を捉える。

(2) 各祭礼を視察し、保管方法や組立・解体の手法を求める。

(3) 文献・絵画史料および現存屋台の形態分析をもとに、編年的理解を得る。

以上を総合して、この地域の彫刻屋台の架構の特徴を明らかにし、史的評価を行う。

こうした木造の組立式彫刻屋台に関する実証的なアプローチは、彫刻表現を駆使したこの地域独特の社寺建築との文化的かつ技術的な関連の理解においても、具体的な結果を呈示できる。また、地域の文化資産の保存修理・活用への展開が期待でき、成果が地元に還元できる点においても有用である。

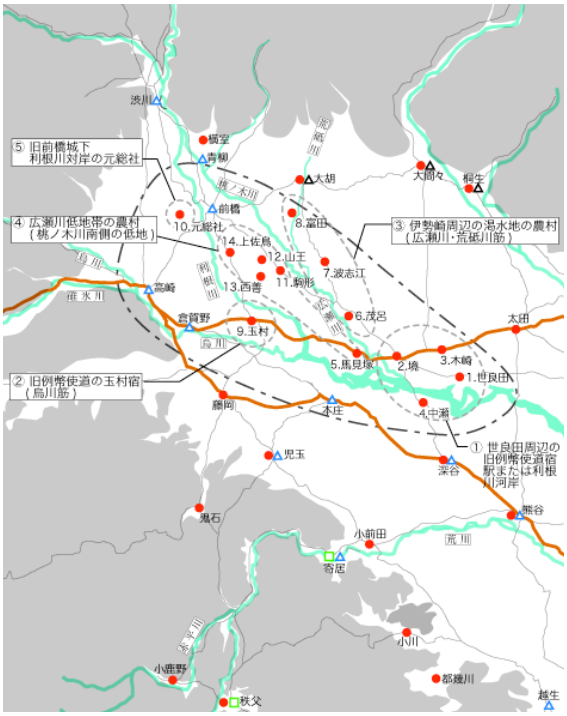
３．研究の方法

この研究では、彫刻屋台の建築技術の実態を、事例の分析をとおして求めようとしている。具体的には、利根川中流域の彫刻屋台について悉皆的な調査を実施し、可能な範囲で計測を行い、実測図を製作し、現状を把握する。また、屋台祭礼が存続している場合には、現地で組立・曳行・解体の方法を写真撮影などにより記録する。部材を保管したままにしている場合には、実際に部材を引き出し、仮組立を試みる。併せて、文献資料や古写真、聞き取りによる屋台祭礼の情報を収集する。こうした悉皆調査による収集データをもとに、架構や彫刻装飾の特徴を抽出し、建築技術の実態を明らかにする。

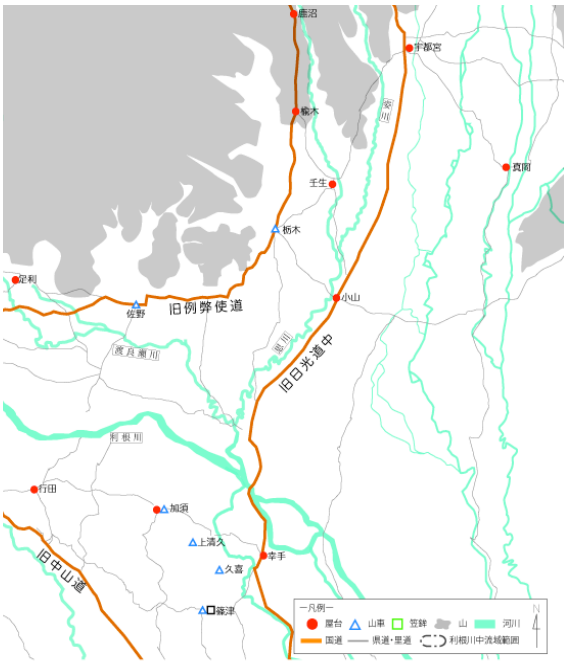
４．研究成果

利根川中流域における彫刻屋台の所在が確認できた 14 地区のうち、戦前に遡る屋台は 46 基である（図１）。これらは祭りのたびに組立・解体される仮設建築であるが、近年は組み立てた状態で屋台庫に保管される例が多い。

屋台の分布をみると、利根川水系の流域ごとに所在のまとまりがみられ、旧例幣使道の街道筋または利根川河岸、赤城山南麓の渇水地帯の農村集落などに点在する。また、利根川中流域周辺では、足利・桐生・大間々の渡良瀬川筋、栃木・鹿沼の旧例幣使道沿い、熊谷・深谷・藤岡の旧中山道沿い、小前田・秩父の荒川筋に屋台が散在する。利根川中流域

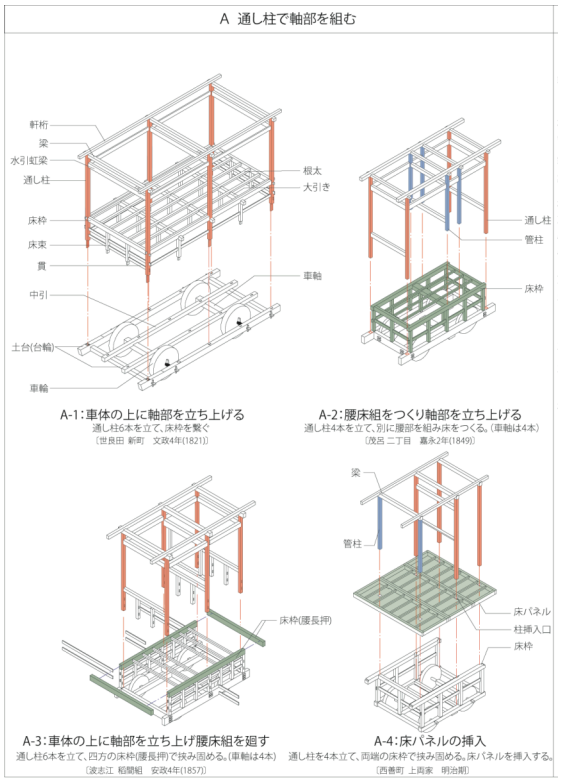


（利根川中流域）



（利根川中流域東周辺）

図１　利根川中流域における彫刻屋台の分布



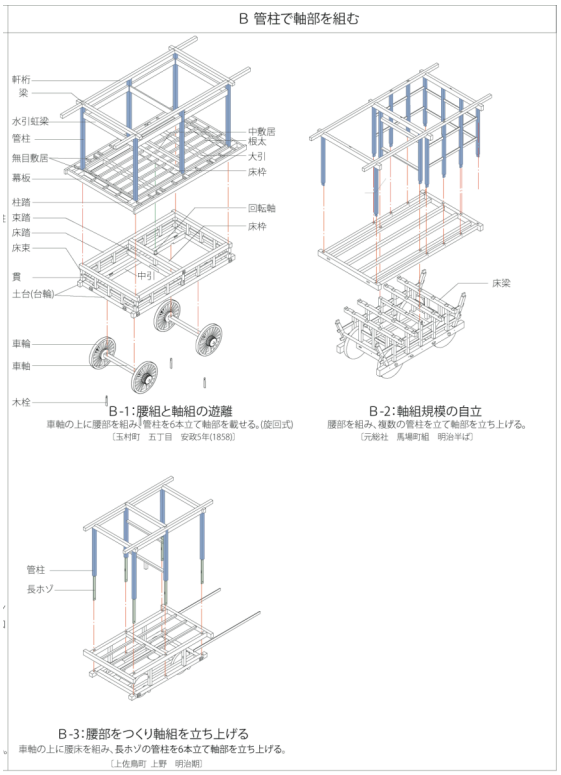


図２　彫刻屋台の架構の類型

に現存する屋台のうち、製作年が判明するのは36基(口伝14基含む)である。現存最古は文政4年の世良田新町屋台で､嘉永期の茂呂、安政期の波志江および玉村の屋台と続く。明治に入ると、中瀬や元総社など各地に屋台が出現する。いずれも精巧な彫刻をもつ木造の屋台であり、組立解体式の飾り屋台または芸屋台である点が特出される。

屋台の基本的な架構は、四輪を付けた台車上に軸部を組み上げ屋根パネルを載せたもので、通し柱または管柱を用いるかにより２類型７系統に大別できる（図２）。通し柱で軸部を組む類型Aは幕末期のものが多く、祭りのたびに部材を組立・解体する架構上の工夫がみてとれる。管柱で軸部を組む類型Bは主に明治期に展開した架構と捉えられ、腰部(車体部分)と軸組上部が二層構造となる。通し柱を用いないため、腰部の規制を受けずに床を拡張できるようになる。

すなわち、現存最古の飾り屋台では通し柱で軸部を組む架構を採用したが、安政５年になると管柱で軸部を組む架構が登場する。明治期に入ると大型の芸屋台が登場し、常設化した回転装置が導入される。こうした彫刻屋台の建築的変遷は、舞台装置の常設化、舞台の拡張、組立や保管方法の簡素化などの機能的要求によってもたらされた。

いっぽう、彫刻装飾については次の点が指摘できる。屋台製作に関与した職人名が判明する事例は多くないが、地元出身の大工、彫物師、塗師などが関与した。木挽は越後の職人であった。複数の屋台製作に関わった弥勒寺親子の作風を注目すると、大工であった音次郎の彫線は鋭く深い。屋台全体は穏やかな表現である。岸大蔵の下で社寺彫刻を手掛けた音八の彫物は、グロテスクな印象を与える神獣など全体が丸みを帯びた作風であった。

これらの成果は、従来の建築史において位置づけが十分になされていなかった問題に対し示唆を与えるものであり、日本の祭礼文化の伝播過程を総合的に検討する上でも、重要な意義を有する。また、彫刻屋台の技術的な側面を捉えることから、地域文化資産の保存継承のための基礎資料として寄与しうるものであり、研究成果が調査地に還元できる点においても有用である。

本研究は、利根川中流域における彫刻屋台の建築技術の主要な側面である架構の系譜を明らかにした。しかし、栃木県内に残存する屋台の一部が未調査であり、関東の彫刻屋台の建築技術の実態を総括するには至っていない。今後も引き続き、調査対象を旧例幣使道の北部地域に広げて彫刻屋台の実態把握を試みる。現存屋台の遡る形態を描く絵画史料の分析、保管方法や組立解体の手法にみる屋台の仮設技術、彫物師と近世社寺建築との関連などの課題について明らかにする。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①長谷川靖訓、<u>黒津高行</u>「幕末・明治期の利根川中流域における祭礼屋台の架構について」日本建築学会大会北陸支部研究報告集、査読無、2012 年 7 月掲載予定、pp.661-664

②長谷川靖訓、<u>黒津高行</u>、鳥海さやか、石田寿信「前橋市における祭礼屋台の架構について」日本建築学会大会関東支部研究報告集、査読無、2012 年 3 月、pp.661-664

〔その他〕

ホームページ等

＜講演＞

①<u>黒津高行</u>「玉村町の祭礼屋台」玉村町文化センター、2011 年 1 月

６．研究組織

(1)研究代表者

黒津 高行（KUROTSU TAKAYUKI）

日本工業大学・工学部・教授

研究者番号：20215114

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：